

二次元ガチ文庫

千夜詠

表紙イラスト：ましゅー

# おし お嬢様 メイト



ドMにさせて  
尽くさせて

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『おしかけお嬢様メイド ドMに尽くさせて』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# おしかけ お嬢様メイド

ドMに尽くさせて

千夜詠

表紙 / ましゅー

## 登場人物紹介

Characters

---

しんぐう きょうすけ

**新宮 恭介**

ちょっとアブノーマルなプレイ嗜好を持つ少年。一人暮らしのためバイトをしながら生活している。

ふじさか りんね

**藤坂 凛音**

生粋のお嬢様。先祖の恩を返そうと恭介の元におしかけ、あれこれと尽くそうとする。

校舎が赤く染まる夕暮れだ。薄暗い玄関からはグラウンドの威勢のいい掛け声と金属バットの球を弾く音が聞こえてくる。

一年のうちでも最も寒いこんな季節に、何のしがらみもなく熱く打ち込める彼らのことをふと羨ましくも思う。下駄箱を開けた途端、移り気な少年の心は憂鬱さと自虐に苛まれた。可愛らしい便箋は、ハート型のシールで閉じられている。いわゆるラブレターというやつだ。フーと一つ溜め息をついた。

大抵は思わずニヤついたりするものだろうか。

「俺のこと……よくも知らないくせに……」

がっかりさせるだけならまだいい。少年は、まだどの誰ともわからぬ少女が、嫌悪を露にした顔で罵声を浴びせてくる悲しい終わりを思い描いていた。

「よお、恭介」

コートポケットにサツと手紙を押し込んで振り返る。

「ん、ああ、お前か……」

クラスメイトがニタリ笑っている。どこか企てを含んだようなそれに、半分無視するよ  
うに歩き始めた。

「なあなあ、これから合コンあんだけさ。お前もいかね？」

「行かねえよ。バイトあんだ。……知ってるだろ」

「一日ぐらいサボったって、バチ当たんねえって。メンバーたんなくって……。てか、お前が来ないと意味ないんだって」

知っている。一年生の時にはよく遊んだ仲だ。こいつはお節介。いつまでも彼女の一人も作らない自分を氣遣つてのことだと充分承知していた。

「……悪い……」

一年前なら形だけでも付きあわなくもなかっただろう。元々父一人、子一人だった身上に降りかかった死別という災難。学費だけは伯父の援助で何とかなっているが、生活費は自分のバイト代で賄っている。一日サボれば明日の牛丼は並盛にランクダウンだ。

(それに、女なんて……)

よくないことだとわかっていてもネガティブな思考に落ち込んでいく。

「そう言わずに……。お前の分は俺が払う……。つて!? なんだ？」

校門の前にやたらとでかい高級外車が止まっている。黒いコートに黒のサングラスの男二人が辺りを見回して、今にもそこから大統領でも出てきそうな雰囲気だ。下校途中の学生達が遠巻きに見詰め、ざわめく好奇心を滲ませていた。

さすがの恭介も思わず立ち止まった。ちよつとした人だかりになっている校門を何事もなかったようにすり抜けるのは至難だろう。

「何なんだろうな？」

「さあな……」

黒スーツが一人、後部座席のドアに手を掛けた。重そうにゆっくりと開かれ、現れた姿は、誰も予想しなかった麗しさだった。

「おっ！ おお……」

隣から興奮気味の声が聞こえ、ざわつきは一層高まった。そんな周りの雑音も一瞬間こえなくなるほど恭介の瞳も彼女に捉えられた。

少し癖のある肩まで伸びた黒髪が、冷たい風に煽られて艶やかに靡く。白いワンピースが清楚な雰囲気醸し出していた。肩に掛けた薄赤いハーフコートの襟を両手でギュッと掴んで、小柄な身体を更に縮こまらせた姿は愛らしい。穢れなき聖少女。そんな形容が似つかわしい美少女だった。

（あんな子を……したりしたら……夢のようだ……）

邪な欲望が作り上げる妄想に一時陥る。遠目から見える煌めくような大きな瞳が涙に濡れて、ぷっくりと愛らしい桜色の唇から苦悶の喘ぎを漏らしていく。血流が下半身に集まりそうになって、コートの前をそつと閉じたその時だった。

瞳が合った。

ドキンと鼓動が鳴った。ほんの少し驚いたような表情の少女が瞬きを三つ。次の瞬間、パッと華やいだような微笑を見せ、そして彼女は走り出した。

「な……っ!!」

土煙をあげそうな怒涛の勢い。陸上部のプリンターも真っ青の瞬発力で、気がつけば彼女との距離はゼロだった。

「ぬあっ、ああ……っ!」

柔らかな衝撃が胸下に当たる。途端にフワリ広がった少女の髪から甘い香りが鼻腔に届き、温もりに包まれていた。

（だ、抱きつかれている!）

ただぶつかっただのではない。彼女の細腕はしっかりと自分の腰に回され、ギョツと離さぬように力が込められている。密着する柔らかな肉感。特に胸下部に押しつけられた乳房の弾力から与えられるたわわな量感が堪らない。

（けっこう……大きい……）

不覚にもそんなことを考えながら股間は身勝手に膨らみ始めてしまう。これ以上続いたら彼女の腹部に押しつけてしまいそうだ。

胸に埋もれていた可憐な顔が上げられた。潤ませた瞳にドキドキ鼓動が鳴る。そして彼女は叫んだ。

「やっと思つきました! 私の……ご主人様!!」

思考が固まった。一陣の冷たい風が流れる刹那の沈黙。直後、

「うおお、何て言ったあつ、今！」

「きゃあああ、嘘お……先輩に、女ああ！」

「ご主人様って言った？ 言ったよね？ なになに、結婚ってこと……」

「あんな可愛い子があ……一目ぼれだったのに……俺の青春は終わった……」

一斉に湧き起こった絶叫、悲鳴に泣き喚き。

「お、お前……そ、そういうわけえ……っ!!」

激しく動揺して裏返った友人の声が聞こえた。

「ち、ちが……っ、何かの間違いだつて……。こ、この……」

ようやく自分の置かれた状況に気づいて、いっこうに離してくれない少女の肩を掴んで強引に離す。

「き、君……誰かと勘違いしているんじゃないのか？」

一瞬キョトンと見詰めてくる彼女は、またニッコリ満面の笑みを浮かべるのだ。

「あら、新宮恭介様ですよ。一生お仕えすると決めたとご主人様を間違えるはずはありませんわ」

彼女の肩から手を離し、ゆっくり、またゆっくりと一歩ずつ後退りする。

「？ ……どうか、なさいましたの？」

「夢だ……。でなきやドッキリか？ そうか、そうだな！ 君は新人のアイドルで、そこ

「えっと……美味しかった……」

言った途端に真っ赤になった。あからさまな表現に彼女が、引いてしまったか心配になる。だがメイド姿をしたお嬢様はブルツと一瞬身を震わせて、ほんの少し恍惚の表情を滲ませた。

少年の腹部に座したまま、凜音はゆつくりと身体を後ろに移動させる。すぐさま、下着一枚の柔らかな尻肉の合間に、硬直しきった強張りが挟み込まれ、そこから薄布越しの微肉に擦られる。

「あふッ！ あうん」

メイド少女は小さく声を漏らす。興奮しきった反応を敏感な鼠蹊部そけいぶに感じ取られ、恥ずかしさと心地良さが交互に湧き起こった。でも彼女は飛び退くでも軽蔑するでもなく、頬を桜色に染めて、優しく嬉しそうに見詰めてくれる。

「き、君が……急に、あんなこと……するから……」

「はい……。凜音は……とつてもいけないメイドでございます」

バツが悪そうに横を向いてしまった。今日初めてあったばかりの男をなぜ彼女はこうも簡単に受け入れられるのか。たとえ先祖代々の教えといえども、嫌々といった雰囲気を感じさせない。様々な疑問も、膨張する欲望に飲み込まれていった。

メイドお嬢様は、更に足先の方まで腰を移動させ、腕を伸ばして優しく股間の膨らみに

触れてくる。

「こんなに、大きくて……硬い……」

「お、おい……」

ガチャガチャとベルトが解かれ、弾けそうなファスナーが下ろされていく。

「ご主人様の許しもなしに、こんなこと、いけないって……。でも……ご奉仕したい……」  
 微かに震えるか細い指先が、ズボン内の下着に手を掛け、そしてゆっくりズリ下ろされた。何をされるのか。恥ずかしさよりも期待の方が大きくて、ドクンドクンと大きく鼓動が鳴っていた。

「ハアああ……。こ、こんなに……凄い……」

琥珀色の瞳を細め、情熱的な視線が、解放されてむっくり起き上がる肉棒に注がれる。バイト後の汗ばんだ生殖器。膨れきって血管が毒々しく浮き上がり、赤く腫れ上がったような先端から、先走った淫水が滲み出ていた。

「これが、本物の……恭介様の……オ、オチン……チン……」

自分で言っておいて、お嬢様メイドは顔を真っ赤に染め上げる。それでも震える指先で硬直した肉茎に触れてきた。

「お、おい、なにを……」

「だ、大丈夫です。ちゃんと、デイルドというもので、特訓してきましたから」

「ええっ!? と、特訓って……。い、いや、そういう意味じゃ……。うおッ!」

両手のしつとりとした指先が、優しくほんのりと暖かく少年の分身を包み込む。

「うはぁ、熱い……。んですなね……」

好奇心と愛しさを存分に含んだ潤んだ瞳に見詰められると、もうどうにでも彼女に身を任せてしまいたくなる。戸惑いを感じさせる遠慮がちな摩りが、本当に初めて男に触れるのだと教えてくれた。

「えっと、こうして……」

慣れていない。それを誤魔化すように「えへっ」と笑いかけるのだ。そんなにしてまで、こんな自分に健気に奉仕しようとする姿が堪らなく可愛い。

(い、いや、こいつが勝手にやってるんだ)

ほだされるような気持ち素直に受け入れられない。でも曲げられた親指と人差し指が感じやすいカリ下に当たりだすと、もうどうでもよくなった。どうすればもつと気持ちよくなれるのか、どうして欲しいのか、そんなことばかり考えてしまつて、まだ唾液に濡れ光沢している唇に眼が向いてしまう。

「な、舐めて……」

呟いてしまつてから、急に恥ずかしくなる。だが凜音は、少し驚いた顔を見せた直後、嬉しそうに返事した。

「は、はい！ ああ、ご、ご命令……」

上体を下ろして腰を高く突き上げていくメイド少女。その可憐な顔が少年の欲望そのままの肉張りに近付いて、ハア、と熱い吐息が掛けられる。

（ほ、ほんとに、こ、この子が、舐めてくれる……）

ねっとり唾液に濡れた舌先が伸びて、つい先程まで、それと絡み合わせていたかと思うとまた興奮が高まってしまふ。微かに震えているお嬢様は、指先で肉棒を起こして、半開きの唇から赤いペロを伸ばすのだ。その時、上目遣いの瞳と視線が合った。

（うお、そんな風に……見られたら……）

キスの時点からもう爆発しそうなのに、急速に排出欲求が湧いてしまふ。早く舐めて刺激して欲しい。でないと押さえつけている凶悪な欲望が、どんな過激な暴挙に自分を走らせるのか怖くて堪らない。

そんな想いを汲んだように、彼女は舌先を肉棒に這わせてくる。いとおしむように両手でそつと幹を立たせ、裏筋を下から上へゆつくりと濡れた舌肌で摩っていった。

「う、うう……」

もうこれ以上大きくならないと思われた肉棒が、またググツと張りを増す。チヨロチヨロと舌先にカリ下を責められると、呼吸が気持ちよく乱れてしまった。

「ハア、ハア……」

沸騰しすぎる排出欲求を見通したように、不意に刺激をやめて、凜音は悪戯っぽく笑ってみせた。もつと長く堪能していたい。そんな気持ちを読んだように、彼女は焦らしてくれる。

「美味しいです……恭介様の、ここ……」

見ず知らずの自分の為にお嬢様はいつたいどれほど痴技を練習してきたのだろう。擬似男根を手に、男を知らぬ少女がまだ見ぬ主人の為に、幾筋もの唾液を滴らせ続ける。

(きつと、今みたい……恥ずかしそうに、少しうっとりして……)

先走りして漏れる透明な淫水を奉仕好きな舌先で掬われる。ねっちよりと鈴口と舌粘膜の間に糸引いて、のたうつように先端を刺激してくれる。同時になやましい吐息が生暖かく男根を湿らせた。

あはあ……はあああ、はあああ……。

(凜音も……興奮しているのか?)

愛らしい唇を開いて覗かせるのは、少年の淫水混じりの唾液で溢れた口内。ちゅぽっ！ と先端が飲み込まれ甘美感に包まれた。

(暖かくて……き、気持ちいい……)

唇で銜えながら、反応を確かめるようにまた上目遣いで見詰めてくる。口端から零れた唾液がトローリ幹を伝って落ちていき、彼女の繊細な指を汚していた。

「うむ、んっ……んうん……」

亀頭を優しく甘噛みして、それから少し奥まで口を沈めてくる。あの淫らな舌使いを再現して、ぬちゆる、ちゅちゆる、じゅちゅ、滑柔らかくカリ首を責めてくれるのだ。

「す、凄いよ……」

嬉しそうに瞳を細め、お嬢様メイドは情熱的に口奉仕を激しくさせる。

唇をきゅつと窄めて、凜音は舌を肉茎に絡ませたまま麗顔を上下に振り動かす。

じゅぽぽ、ぬじゅぽ、じゅぷぷ……。唾液に濡れた摩擦音と空気の抜ける音が猥褻に奏でられると、肉棒は更に口内で膨張を増してしまう。

「うはあ、ううん、まら大きくなふええ、あふうう、んううん……」

時折息苦しそうに眉を細めながら、それでも過激な奉仕をやめようとしなないメイドお嬢様。とうとう指先を離して、まるで自らを虐めるように、強張りを喉奥にまで滑り込ませ始めた。

「恭介しゃまの、おひんひんれえ、おくひ、おかひゃれ、うぐうう……」

だらだらと口の周りを涎で汚し尽くし、凜音は嗚咽に恍惚の表情を見せてくる。

そんな苦しさの中にあっても彼女は奉仕に手を抜かなかつた。喉粘膜と舌ペロという暖かな刺激が肉棒を余すところなく包んでくれる。ぐしよぐしよと熱くなりすぎた強張りに口内を掻き乱されるたびに、なやましげに腰をくねらせるのだ。

潤んだ瞳が、全てわかっているとでも言いたげに煌めいている。

「凜音……」

「そ、その……やっぱりメイドは、自分のされたいことをご主人様に押しつけたりはしないもの……ですし……、それに……」

モジモジと恥ずかしそうに僅かに俯くメイド少女。

「……好き……なんです……命令されるの……」

元々桃色を帯びた少女の顔が真っ赤に染まった。もの凄く可愛く思えて、それと同時に嗜虐的な気分も高まってしまう。だから少し虐めたくなくなった。

「じゃ、じゃあ、命令だ。君がして欲しいことを正直に全部告白するんだ」

「え……っ！ え、えっと、そんな……その……」

予想していなかったのだろう。野外で自分の性癖を大声で叫んだ少女が、しどろもどろになって何度も瞬き繰り返している。

「命令だ。さあ……」

「め、命令……あん……。んっ、その……こんなこと、恭介様だからされたいんで、その誰にでもって、わけじゃないんです……。ずっと、そのことばかり考えて……はああ……」

だんだん自分一人で気分を高めていってしまうマゾメイド。

「えっと、すみません。……処女の凜音は、初めての経験で、ああああ……犬みたいな恥



ずかしい格好をさせられ、はあはあ、い、痛くても、うアハあああ、お構いなしにいつ、入れられちゃいたいんですうううう！」

羞恥と恍惚を濃厚に表情に示し、もういつてしまいそうなくらいに身を震わせていた。恥ずかしがりながらも従順なメイドは、待ち望んでいた命令である四つん這いの格好をとる。蛍光灯を消してカーテンを開けると、外の雪明かりに照らされて、お尻を高く突上げたとてゝも猥褻な彼女の姿も幻想的な美しさに溢れていた。

「凜音の一番いやらしいところが、丸見えだよ」

「いや……あつ」

ブルツと震えて羞恥の快感を示す姿態。丸く肉付いたお尻の双球の合間から、愛らしいくすみピンクのアナル孔が覗け、そこから下にはいやらしく肉ピラ食み出した牝本体がある。肉棒を噛み締めたい欲求を表すように、愛液という、ぬちよぬちよした涎を垂らし、光沢したサーモンピンクが欲情を駆り立てた。

（これが……凜音の、オマ○コ……）

感動に似た心の震えを覚え、優しく目を細めながら指を伸ばす。

「あふ……っ、あ、うん……」

ぐちゅ、ちゅちゅ……。触れた瞬間に淫蜜が絡みつき、滑りに誘い込まれるように指先が粘膜裂の奥へと沈み込む。溜まり込んでいた蜜液が指間からトローリ垂れ落ちて、牝肉

をぶち込まれる準備は万端だった。

（ここって、触れるだけでもこんなに気持ちいいんだな……）  
ぐっしより湿った花弁を指先で摘んで広げてみる。

「ああん、そ、そんなに……顔、近づけたらあ……あはあ……」

押し広げられた陰唇の奥で、ヒクヒクとまるで呼吸するように蠢いていた。

（こ、ここに、もうすぐ、俺のチンポを入れるんだ）

濃厚な甘酸っぱい淫臭を放つ秘粘膜に興奮した鼻息を当ててしまふ。女陰全体が悦び痺れているようで、包皮から捲れ出た肉芽さえもピクピク反応しているように見えた。

「だ、だめ……さっきお漏らしして……はあはあ……汚れてますう」

「こんなにエッチなお汁が出ているんだ。もう洗い流されているよ」

膝立ちになって、ずっと硬直しきったままの肉棒を濡れきった卑肉にあてがった。まだねっとり白濁液に汚れたそれが、陵辱しているような気分を高めてしまふ。

「あふっ……はあぁ……」

プルプル尻肉が震え、少しだけ身を強張らせた凜音。従順な態度を崩さぬまま、垣間みれる処女反応にも、劣情は高まる一方だった。

ぬちゅちゅッ、くちゅ……。肉花弁に先端が包まれて、心地良さが広がっていく。淫蜜が肉棒の下を伝い、乾きかけた白濁に混ざっていった。

「凜音のここ……凄く、気持ちいい……。じゃあ、入れるよ」

小さく頷いたメイド少女の拳がギュツと握られた。彼女の腰に手をあてがいがい、ヌポポツ！ 張りきった亀頭が蜜孔を押し開く。

「あうツツ！ はあはあ……」

汁だくに塗れて、蜜孔が優しく噛み締めてくる。いきり立った肉棒で早く奥まで舐め尽くしたいのだが、ここは欲求を押さえ込んだ。

「凜音、奉仕するのは君だ。自分で腰を動かして、このいやらしいオマ○コで俺を満足させてくれ」

「え……っ!？」

処女には酷な命令だ。たとえ凜音にそれができなくても、彼女の愛情の籠った忠誠心をもはや疑うべきもないのだが、「……はい」と少し震えた声で答えてくれた。

「うっ、くう……っ、ううん……」

ヌズズツツ……。押し殺した苦悶を漏らし、メイドのお尻が後ろへと動く。

「きつ……っ、あうっ、はああ……」

溢れる蜜液の助けを借りて、亀頭をずっぽりと銜え込む。すぐさま先端が処女の証にぶつかって、抵抗感が増していった。

（い、痛いのか、凜音？ はあ、はあ……ああ、もの凄く、き、気持ちいい……）

生暖かく包まれて、滑る内粘膜がぐいぐい食い締めてくる。ヒクヒクとした蜜孔の蠢きが局部に伝わり、蕩けそうな気分陥ってしまう。

「どうした凜音、やめるか？」

肩で息をしながら一度腰を止めた処女は、項垂れたまま首を横に振った。

「い、いえ……はあはあ……っ、大丈夫……。んっ、凜音は……真性の、マゾ牝ですから。それに……」

「それに……？」

「恭介様に……処女をお渡しする瞬間がああっ、た、堪んないんですうううっ！」

ヌズズブズブツツッ！

「うくあああああああつ！ い、痛い……恭介様が、入ってきましたううっ……」

堪らず声を張り上げた凜音。彼女の眉を顰めた苦悶の中に、確かな悦びが混じっている。二人が夢見たその瞬間。彼女の瞳から一滴の涙が流れ、貫きと同時に背筋を反らせて全身が震えたようだった。

ぬちよぬちよの肉壺の中に、陰茎がどんどん吸い込まれ、膣粘膜が肉棒を余すところなく舐めてくれる。

（うわあああ、こ、これが、凜音のオマ○コの中……暖かくて、しっとり包んでくれて、うくうっ、すぐ、出しちゃいそうだ……）

健気で一途で、明るく魅力的なお嬢様。彼女の初めての男になれたことを誇りに感じ、悦びがすぐにも爆発しそうだ。

限界まで飲み込もうと、メイドはぐりぐりお尻を近付けてくる。柔らかな尻肉と少年の腰が当たり、尚も挟り込まれる局痛を欲しているようだった。

「はうっ、ああああああ、奥までえ……っ！ はあはあ、はああん……」

全てを飲み込んで、歡喜に喘ぐ被虐メイド。白い尻肌が桜色を帯びて、結合部からとろとろと鮮血の混じった淫蜜が漏れ出て睪丸を濡らす。

「初めてなのに、こんなに感じて……、凜音は本当にどうしようもない淫乱なマゾ牝だね」  
 本当は自分との行為に悦びを示す凜音が愛しく、嬉しくて堪らないのだ。だからもつと虐めてあげたくなる。

パシッと平手でお尻を叩く。

「あうッッ！」

「ほら、しっかり腰を動かして、もつと俺を気持ちよくさせてくれ。命令……だよ」

命ぜられることの大好きな隷属癖な愛奴は、軽いアクメに達したかのようにブルツと身を震わせた。

「ふあ、はい……」

四つん這いのまま、凜音は腰を前後にグラインドさせ始める。

ヌズズツツ！ズチュズチュ……。まだなめ

されてない窮屈な濡れ穴でも、健気に腰を振る牝メイド。そのたびにお尻の穴がヒクつくのが見えて、高まる興奮と射精欲求に何度も尻肉を叩いて震わせた。

パシッ、パシッ、パン、パンツツ！

「あふいいつつ！り、凜音のおつ、うくはあ、ドスケベなオマ○コおおつつ！恭介様のオチンポにいつ、あうううう、ご奉仕してますうう！」

嬉しそうに叫ぶ隷属メイドは、悦びの涙を流している。黒髪を振り乱し、巨乳をブルンブルン揺らせて叩き合わせながら連続的に身悶え、閉じられない桃色の唇からとうとう涎を滴らせた。

「うはああああ、凄いいいいつつ……。痛くされてえ、むちゃくちゃにい、犯されてるみたいいいつつ！このままじゃ一人で、イイイイいつつ、いつちやう……」

夢中でお尻を振り続ける凜音に対して、本当は少年の方がいつ精を爆発させてもおかしくなかった。ぐいぐい食い締める蜜壺が尿道を圧迫して、かろうじて塞き止めているにすぎない。迸るほどの淫蜜に少年の陰毛もぐつしより濡れ尽くし、ジュポジュポと愛液が掻き混ぜられる音が六畳に響いている。

「り、凜音……くうう、俺も、一緒に……」

限界が近いことを示すように、少年の指先が柔らかな尻肉に食い込んだ。もう彼女だけ

に任せることもできず、欲求に耐えることもできず、溢れる想いを叩き込むように苛烈に肉棒を突き動かした。

ジユプツ！ ズブズブウウツツ！

陵辱めいた初体験に、隷属の悦びを身体中で表す被虐少女。ぐちゅぐちゅ汁だくな牝肉で生殖器を激しく擦り、ドロドロの欲望そのものである男汁を絞り出そうと狂い振るう。

「あはあああああん、恭介しゃまがあああ、凜音の中を虐めてくれてるうううツツ！ りんねえ、いつちやあツツ、汚いオマ○コ、チンポで虐めりやれてえええ、くはああああ、いつちやいましゅうううう！」

括約筋が心地良い圧迫を感じて、メイド少女の中で肉棒がまた一段大きさを増す。痺れ尽くして頭が真っ白になりそうに、

「凜音、りんねえええツツ、いくぞ、ぐああああツツ、出すぞおおツツ！」

全ての欲求を解放するように、獣と化した二人の腰が互いに叩きあう。快樂一色に思考が染め上げられ、秘部に牡肉を銜えたまま少女のお尻が大きく跳ねたその時、

ドプツツ！ ドビュルルツツ、ドプドプツツ！

「あふあつ！ ふひやああああああ、あちゅいいいいいいツツ！ 入ってええええ、イク、イク、イクましゅううううツツツツ！」

ビクビクビクツツツ、ぐしよぐしよの肉壺の中で暴れまわる牝本体。何度も何度も跳ね

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**